次の古文は、『枕草子』の第一段である。読んで、あとの問いに答えなさい。

春はあけぼの。aやうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、1闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いとb近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。2まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬は①つとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいと②つきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて③わろし。

（『枕草子』による）

（注）あけぼの＝夜がほのぼのと明けるころ。やうやう＝だんだん。山ぎは＝山に接するあたりの空。あかりて＝明るくなって。紫だちたる＝紫がかっている。たなびきたる＝横に長く引いている。闇＝月の出ていない夜。なほ＝やはり。飛びちがひたる＝入り乱れて飛んでいる。ほのかに＝かすかに。山の端＝空に接する山のふち。寝どころ＝ねぐら。さへ＝～までも。まいて＝まして。雁＝秋に北の国から渡ってくる鳥。つらねたる＝列をつくっている。はた言ふべきにあらず＝これもまた、言いようもない（ほどよい）。さらでも＝そうでなくても。炭もて渡る＝炭を持って（廊下を）通っていく。ぬるくゆるびもていけば＝（寒さが）だんだんやわらいでいくと。火桶＝木でできた丸い火ばち。灰がちに＝灰ばかりに。

【『枕草子』と清少納言】『枕草子』は、今から千年ほど前、平安時代の中ごろに書かれた随筆である。作者の清少納言は、一条天皇の后である中宮定子に仕えた女房で、和歌や漢詩の知識の豊かな人だった。同じころ、一条天皇の中宮彰子に仕えた紫式部は、『源氏物語』を書いている。『枕草子』には三百ほどの段があり、この第一段のように季節や自然をえがいた段のほか、「うつくしきもの」のように同じ種類のものを集めて並べた段や、宮中での出来事を思い出して書いた段がある。どの段にも、身のまわりのものごとを細かく見つめ、自分が「をかし」と感じたものを、生き生きと書き表す作者の目が感じられる。第一段では、四つの季節それぞれについて、一日のうちでいちばんよいと思う時間と、そのときの景色や人々の様子を取り上げている。

【第一段の読み方】第一段は、どの季節も「春はあけぼの。」のように、季節と時間を短く言い切る形で始まる。そのあとに、その時間に見える景色や人々の様子が、目に浮かぶように書かれている。たとえば春の段落では、夜明けの空が「白く」なり、やがて「紫だちたる雲」がたなびくまでの、ほんの短い間に色が移り変わっていく様子をとらえている。作者は、季節ごとの「いちばんよい時」を、一日の中のわずかな時間に見つけているのである。季節ごとに、作者が何に目や耳を向け、何と何を比べているかを確かめながら読もう。

【「をかし」と「あはれ」】『枕草子』には「をかし」ということばが数多く使われていて、ものごとを明るく生き生きととらえる感じ方が特色になっている。そのため、『枕草子』は「をかしの文学」とよばれることがある。これに対して、しみじみとした趣を表す「あはれ」は、紫式部の『源氏物語』を特色づけることばとされている。

【平安時代の冬のくらし】そのころの屋敷には、今のような暖房の道具はなかった。人々は、火桶や炭びつに炭火を入れて手をあたため、寒い朝には、宮中に仕える人々が炭を運んで、部屋ごとの火桶に火を入れて回った。冬の段落の「炭もて渡る」は、その様子である。

問一 aやうやう・b近うと、本文中の「なほ」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a

b

なほ

問二 ①つとめて・②つきづきし・③わろしの意味として最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　ふさわしい　　イ　夕方　　ウ　よくない　　エ　早朝　　オ　めずらしい

①

②

③

問三 「すこしあかりて」（少し明るくなって）とあるが、少し明るくなったのは何か。春の段落から三字で抜き出しなさい。

問四 1闇もなほ（闇夜もやはり）とあるが、作者は「闇」を何と比べて、「闇夜もやはりよい」と言っているのか。夏の段落から四字で抜き出しなさい。

問五 2まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかしとあるが、「まいて（ましして）」とあるのは、雁を何と比べているからか。秋の段落から一字で抜き出しなさい。

問六 秋の段落で、作者が目ではなく耳で味わっているものを二つ、それぞれ三字で抜き出しなさい。

a

b

問七 冬の段落で、作者がよくないと感じているものとして最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　雪が降って、あたり一面が白くなった早朝の様子。
イ　寒い朝に、人々が急いで火をおこして炭を運ぶ様子。
ウ　昼になって寒さがゆるみ、火桶の火が白い灰ばかりになった様子。
エ　霜が真っ白におりた、とても寒い朝の様子。

問八 冬の段落で、作者は「いとつきづきし」と「わろし」を比べている。ここから、作者は冬らしさをどのようなものと考えていることがわかるか。「寒さ」ということばを使って、四十字以上、五十字以内で書きなさい。

解答（答えと短い解き方）

歴史的仮名遣い 標準① 枕草子を読む

本文の読解

問一 a　ようよう　　b　ちこう　　なほ　なお

「やう」は「ア段＋う」なので「よう」。「近う」は「ちかう」→「ちこう」。「ほ」→「お」で「なお」。

問二 ①　エ　　②　ア　　③　ウ

①「つとめて」は早朝。②「つきづきし」は、ふさわしい。③「わろし」は、よくない。

問三 山ぎは

「やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて」。「山ぎは」は山に接するあたりの空。

問四 月のころ

「月のころはさらなり（言うまでもない）、闇もなほ（やはり）」と続いている。

問五 烏

直前に「烏の寝どころへ行くとて、……飛びいそぐさへあはれなり」とある。

問六 風の音／虫の音（順不同）

「日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず」。日がしずんでからは耳に聞こえる音。

問七 ウ

「昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし」とある。

問八 （例）冬は寒さが厳しいほど冬らしくてよく、寒さがゆるんで火の勢いもおとろえた昼はよくないと考えている。

寒い朝に急いで火をおこす様子は「いとつきづきし」、寒さがゆるんだ昼は「わろし」とある。